

交差する「対話」、もしくは[生]の上昇と完成

シュティフターの『晩夏』論 — II —

Der Dialog und das Leben Stifters "Nachsommer" - II -

松岡幸司*

Koji MATSUOKA

0. 導入

シュティフターの『晩夏』を読み解く鍵になるのは「対話」の展開と「晩夏の[生]」に至る過程である。本研究の前半¹⁾において明らかになった事は、ハインリヒが「事物の要請」に対する応答、そしてリーザハや父を相手にした人間相互の呼び掛けと応答、この二つの種類の形式の対話を進めていく事で、人間的な成長を遂げていく、という事であった²⁾。この推移には、認識と表出の問題が並行している。つまりここで人間的な成長の基準として支配しているものは、「普遍的なものの認識」であり、ハインリヒの認識が——同時に表出も——自然科学的なものから芸術的なものに移ることにより、事物の本質を表出する形象を捉えるに至った過程と結果が、ハインリヒの人間的な「上昇」を生み出したのである。

それでは、このハインリヒの成長、つまり上昇によりハインリヒに生じた事はどんな事なのか。そしてその『晩夏』という作品全体との関係はいかなるものなのか。さらには、この『晩夏』という作品は何なのか。これらが、本論の明らかにすべき問題である。

本研究前半の導入でも述べたように、リーザハの「合わせ鏡」たるハインリヒの成長は、「晩夏の[生]」の完成への過程と不可分の関係にあると考えられる。「晩夏の[生]」の途上を生きるリー

ザハとマティルデ、作品の最後で「晩夏の[生]」へと足を踏み出そうとするハインリヒの両親³⁾、そして本論で明らかになるが、「晩夏の[生]」を完成させる役目を担うハインリヒとナターリエ。この三組の夫婦——ハインリヒとナターリエは作品の最後に結婚するのだが——は、誰もが「晩夏の[生]」の完成へ進む作品の展開に、大きな影響力を持っている。子のないリーザハと夫のいないマティルデ、この二人がいかにして「晩夏の[生]」の完成まで行き着くのか、この点を明らかにする事で、上記の問題は、自ずと明らかになる。

この『晩夏』という作品は、〈リーザハがマティルデと「晩夏の[生]」の完成するまでの経緯を描いたものである〉という一文に要約できるのではないだろうか。このような事を意識して、論を進めていきたいと思う。

I. 『晩夏』における「呼び掛けと応答」 ——「対話」という形式

I-1. ハインリヒにおける「人間の上昇」

ハインリヒは、「事物の要請に対する応答」と「人間相互の呼び掛けと応答」の遂行を経て「人間の上昇」を始めた。この「人間の上昇」の内実は、一体どんなものなのか。マティルデとハインリヒの会話を見てみる事にしよう。

* 非常勤講師

M (マティルデ) : 私どもは皆あなたの御意見をうかがいたいと思っておりますから、どうか一緒にいらして、この集まりにお加わりになって下さい。

H (ハインリヒ) : 私の意見などとるに足りないものです... 私が美しいものに対するいくらかの知識と感覚を持っているとすれば、それは全てこの家の御主人のおかげです。快く私を受け入れ、私の中から色々なものを引出して下さいましたが、そうでなければそれは決して意味のあるものにはならなかったでしょう。

M : ... あなたが御自分の意見を軽く見るのは間違っています。私どもの友人に接したため、あなたの才能が早く開花したならば、それは当然の事です。私たち人間にとって、才能はすべて他人によって引出されるものなのです。他人のすぐれた才能、普通ならばもっと遅く現れる才能をより早く伸ばせるというのは、すぐれた人々の幸福な特権です。(S. 427f.)

謙遜もあるだろうが、ハインリヒがまだ気づいていないものに対してマティルデは、「才能が開花した」と言い、その開花が「すぐれた (bedeugend) 人」、つまりリーザハによるものである事を指摘している。このような「才能の開花」をもたらした経過についてマティルデは以下のように簡潔にまとめている。

M : あなた御自身の中に高貴なものや偉大なものへの素質があるのは、自ら進んで学問の仕事をお選びになったことでも明らかです。このような仕事は、あなたがお決めになったような年頃の若い人たちは選ばないものです。あなたの心が美しいものに向ったのも、研究の対象をすぐに写生し始めた事で明らかです... そしてついにあなたは別の事物、つまり人間の顔や風景の写生を試みるようになり、詩人にも心向ける様になりました。(S. 428)

このマティルデの「要約」は、[美]に向う、つま

り事物を象徴として捉える事によりその事物に内在する「普遍的なものの把握」に至ったハインリヒが人間の顔や風景、そして詩人に心向ける事によって、事物と人間の本質を理解しようとし始めた、という事を的確に言い表している。これは実に幸運だったと言えよう。後に「美の形成」が話題になった時にリーザハは以下のように言っている。

R (リーザハ) : 才能が対象に的確に導かれる、という事がそれほどしばしば起きる事ではない、という状況は残念ながらとてもありふれた事なのです。(S. 540)

つまりハインリヒの素質が才能として幸運にも開花したのは、それなりの理由があるからなのであり、その一つが、リーザハとの出会いをきっかけとした「対話」の連続だったと言える。それと同時に「高貴なものや偉大なものへの素質」を見抜き、学者への道を勧め、[美]に対する「胎教」を行なったハインリヒの父の存在も忘れてはならない。この二人との「呼び掛けと応答」、すなわち「対話」により、ハインリヒの持っていた「人間に内在する偉大さ (das dem Menschen inwohnende Größe)」(S. 541) が花開いたのである。

このような経緯についてハインリヒ自身は、ナターリエとの会話において次のように述べている。

H : 世界が明るく美しい時がありました。私は様々なものを認識しようと努め、絵に写し、文字で書き留めました。その後全ての事物がより難しくなりました。学問的な課題がなかなか解決できず、絡み合い、次々と新たな問題が出てくるのでした。それから別の時が来ました。つまり、私にとって学問は目的ではなく、個別的なものを知っているかいないか、という事には何も意味がないかのように思えたのです。世界が、内面的な美しさによって輝いたので。その美しさは個々の部分には分けられず、一挙に把握すべきものでした。私はそれに驚嘆し、それを愛し、自分に引きつけようとし、そこにあるに違いない。

未知なるものと偉大なものに憧れました。
(S. 439)

ここに述べられた三つの段階は、マティルデの語った内容と酷似している。が、ハインリヒ自身が語ったところに意味がある。「世界の内面的な美しさ」、そして「そこにあるに違いない未知なるものと偉大なるもの」。事物がハインリヒに向って表出している全体としての美しさには、その事物の「普遍的なもの」が現出しており、それを認識する過程をたどる事によって初めて、ハインリヒは「人間の上昇」を始めたのである。この「世界の内面的な美しさ」を絵に写す、という事は、やはり後のリーザハの言及—芸術に関してではあるが—と関連している。

R: (すべての芸術について) 私が言った事は、形態を直接的に模倣する、という事ではなく、この形態に内在する精神を認識し、その精神で心情を満たし、その認識と満たしをもって創作する、という事でした。(S. 353)
(斜字体は論者による)

つまり「内面的な美しさ」とは、事物の形態に現れている「精神」である。[美]の認識に到達し、人間や風景、詩人に心を向けるようになったハインリヒは、対象の持つ本質、つまり精神にひかれ、憧れ、その認識と表出を心がけるようになったのである。

1-2. 『晩夏』における「対話」

父: 彼(ハインリヒ)の未来を保証する性質は、あなたから得たのです... あなたが彼を教育し、高めたのです。

R: ... 本来の自己が発展したのです。最初はあなたが、そして彼の周りの人々との触れ合いがそれを助けたのです。(S. 713) (斜字体は論者による)

この会話は、先述したリーザハとハインリヒの父の役割をはっきりと示している。ハインリヒにそなわっていた素質に気づき、その開花の可能性を最初に後押しした父と、リーザハとの交際であ

る。しかしこの二人の役割はそれだけではない。毎年仕事場である山と、薔薇の家と、そして実家を巡っていたハインリヒは、リーザハと父の間を行ったり来たりしていた、と言えよう。そしてその都度のその二人との対話が、彼を成長させたのである。つまり、ハインリヒは「螺旋状の上昇」をしていったと言えよう。それぞれの側に父とリーザハがいて、その「すぐれた」二人の間をたどりながら上昇する。その二人の間には、やはりその時々に出会い、刺激を受けた人々との触れ合いがある。夏にリーザハから受けた刺激、そこで開けた新しい世界は、冬に父との生活の中で確固としたものになり、なお発展していく。ハインリヒの「人間の上昇」は、父と、そしてリーザハとの「対話」の繰り返しを基盤として生じたものなのだ。

しかし『晩夏』におけるハインリヒをめぐる「対話」はこれだけではない。上述の螺旋状の上昇を形成した対話には、ハインリヒを介したリーザハと父の「対話」が併存している。つまり、それぞれによるハインリヒとの対話が交互に繰り返され、その度に上昇していくハインリヒの姿を通して、リーザハと父は「対話」をしていたのである。

R: あなたほどお目にかかりたいと思っていた方はありません。私たちはもうずいぶん長い間おつきあいをしておりました。あなたの息子さんの愛を通じて、もう長いことあなたを敬愛しておりました。

父: 私も、私の息子の愛を通じて、あなたを敬愛しておりました。(S. 695)

二人は初めて会った際に、上記のように言葉を交わしている。つまり、ハインリヒの成長という点だけではなく、お互いの芸術に対する趣向、知識、世界観などの交流以上に、お互いに敬愛するまでの「対話」が、ハインリヒを通して成されていたのである。そしてハインリヒとナターリエの結婚を機に二人が直接言葉を交わす事によって、この二人の「対話」の形式が完成し、二人の「生」が交差するのである。

II. 「晩夏の〔生〕」

子のないリーザハと彼の導きを受けて人生の高みへと進むハインリヒ。この二人の関係を考える時に思い起こされるのは、『森ゆく人 (Der Waldgänger. 1847)』のゲオルグと森番の子供ジミの関係である。そこでこの章では、『森ゆく人』との比較を通して、リーザハの置かれた状況を浮かび上がらせてみたい。

II-1. 『森ゆく人』と『晩夏』

この二つの作品を読めばすぐにわかる事だが、ゲオルグとリーザハには共通した点が多い。子なしの故に離婚した後に再婚したゲオルグには二人の子供がいたが、先妻コロナにより、己れが歴史に参入するための子供を奪われ、彼は人生の老年期に「森ゆく人」として人生の森をさ迷い歩くことになる⁴⁾。他方リーザハも子なしのまま妻と死別し、老年を迎える。確かにグスタフの育ての親になるが、グスタフはあくまでマティルデの子であり、いずれはシュテルネンホーフを継ぐ事が期待されている事からも、リーザハの子にはなり得ない事がわかる。

決定的な共通点は、“heimatlos” と “familienlos” という特徴である。ゲオルグは、両親との死別、コロナとの家庭の喪失、再婚後、前述のような意味で子供を失った後に妻とも死別し、家庭を失った。リーザハにしても、両親と妹の死、ハインバッハでの第二の家族の喪失、そして妻との死別を経験しており、両者共に三度の喪失を経験している事は、作品構造的にも興味深い類似点となっている。

そして、さらに両者に共通するのは、ゲオルグはジミを、リーザハはハインリヒを、つまり二人とも他人の子を介して父になる、という点である。

これらの共通点は、この二つの作品間でゲオルグとリーザハとを比較検討する際に大きな拠り所となっている。そこでまず、『森ゆく人』における「枯れ枝」のモチーフ——上記の特徴のメルクマルでもある——による視点を『晩夏』に適用してみる事にする。

II-2. 「枯れ枝」⁵⁾

1) ゲオルグの「枯れ枝」

人生の終末期に達した時、上述のように家庭を失ったゲオルグには、前進を果たすための「若枝」である子と、自分の「枯れ枝」を落とす大地、つまり人生の終末に還るべき Heimat が欠落していた。しかし森番の子供ジミとの出会いにより、状況は一変する。ゲオルグはジミを教育し、進むべき道を示す事により、己れの Heimat である「森」を得、その「森」の子供の父親になる。そこで初めてゲオルグは、歴史という永遠の循環の中に参入し得たのである。

2) リーザハの「枯れ枝」

リーザハの場合、グスタフは彼にとっての「若枝」とは成り得なかった。確かに養父ではあったも、グスタフはマティルデの息子、シュテルネンホーフの後継ぎであり、マティルデは、まだリーザハにとっては他人に過ぎなかったからだ。しかしハインリヒの登場、そして彼のナターリエとの結婚によって、状況は一変する。つまり自らが、その人間の上昇を導いたハインリヒという「息子」を得る事⁶⁾でリーザハは、己れの「枯れ枝」を落とす地、アスペルホーフをハインリヒに継ぐ事ができ、家庭という Heimat を得ると共に、歴史への参入を果たすのである。

リーザハがハインリヒという「息子」を得るにあたっては、ナターリエの存在が不可欠であった。つまりナターリエという「娘」を得、一市民に戻るといふ事⁷⁾、ハインリヒが「息子」に成り得たのである。これは、マティルデと——形式上はともかく——結ばれる事を意味している。この点をマティルデの側から見ると、ナターリエがハインリヒと結ばれて「息子」となる事で、共通の「息子」を持つリーザハと初めて結ばれる、といふ事になる。⁸⁾

II-3. 「晩夏の〔生〕」——リーザハとマティルデ

「息子」ハインリヒと「娘」ナターリエ、「生」の結合を意味する二人の結婚は、リーザハとマティルデに関しても同様の意味を持つ。ハインリヒが、リーザハとマティルデが結婚していない事に、苦痛とも言える心の動揺を持つ、と言った

時、リーザハは次のように言う。

R: その時はもう過ぎ去りました。そのような関係はもう素晴らしいもの (schön) ではないだろうし、マティルデも恐らく一度も望まなかったでしょう。(S. 685)

人生の素晴らしい時、つまり二人の愛が燃え上がる人生の盛夏は、ハインバッハの家での喪失以降、過ぎ去っていたのである。これから人生の夏を迎えるハインリヒとナターリエの結婚、[生]の結合に対して、人生における晩夏の時期に結ばれたリーザハとマティルデの[生]の結合は、一つの「晩夏の[生]」を形成する。

Ⅲ. 「晩夏の[生]」の完成

ハインリヒとナターリエの結婚の後、ハインリヒの父は、ハインリヒに対して「私もリーザハさんのように晩夏を送るのだ (S. 729)」と言っている。つまりハインリヒの父も、「晩夏の[生]」へと足を踏み出すのである。この点を、リーザハの場合と比較してみる事にする。

R: 今までしばしば言ってきた事で、尊敬すべきあなたの父上とも一致する事ですが、人間は人生の道を自分自身のために、自分の能力を完全に発揮するために選ぶべきです...ただ人類の役に立つというだけで自分の道を選ぶという事は、もっとも重い罪であるでしょう。(S. 616)

このリーザハの言葉は、ハインリヒの父がハインリヒを専門のない研究者にする事に決めた時と同じ内容のものである。このように共通した人生観を持つ二人は、芸術の分野でも同じ志向性を持つ。リーザハとの対話により成長を遂げて家に帰り、父と話をする度にハインリヒは、リーザハの見解との共通点を父に見出し、以前にも増して父に対する尊敬の念を深める。前述のように、父とリーザハ、この二人の共同作業により、ハインリヒは「人間の上昇」を果たすのである。これは、この二人が同じ方向を見ていたからに他ならない。そして何よりも「若枝」の前進に対する用意

の周到さ、という点で、両者は一致している。リーザハは、アスペルホーフという、彼の[生]をつぎ込んだものをナターリエに用意しており、ハインリヒの父は、ハインリヒの幼い頃からの財産管理だけでなく、結婚の際にはリーザハの全財産に匹敵するほどのものを息子に贈る (S. 729)。つまり、ハインリヒの父も、人生の終末期に己れの「枯れ枝」を落とす準備を、リーザハと同じようにしていた、という事になる。直接会う以前から互いに認め合い、尊敬し合っていた二人は、ハインリヒとナターリエの結婚により、互いの「晩夏の[生]」への道を交差させ、それは二人の、歩み始めたばかりの若い夫婦に受け継がれていく。長い年月の間に愛の形は変わり、ますます強いものになっていく、というハインリヒの母の言葉は⁹⁾、若い夫婦のたどり行く道、晩夏への道を如実に言い表している。

リーザハとマティルデが「晩夏の[生]」を形成し、ハインリヒの両親が「晩夏の[生]」を目指し、ハインリヒとナターリエが晩夏へ向うための入り口に立つ。ハインリヒとナターリエの結婚には、この[生]の三つの結合形態、いずれもが「晩夏の[生]」に結びついた形態が関わっており、ここで「晩夏の[生]」のサークルは、完成形を見出すのである。

この三組の「[生]の結合体」の結びつきは、館によって象徴的に現れている。ハインリヒが結婚前の大旅行に行っている間に父が買った地所グステルホーフは、アスペルホーフとシュテルネンホーフの間に位置している。そしてハインリヒとナターリエは、——首都の実家を含め——そのいずれの館に住んでも構わないとされており、この二人が三つの館を結びつけているのである。しかし、この結びつきを強固なものにしているのは、やはりハインリヒの存在である。

H: 婦人達 (マティルデとナターリエ) は、私によって再び支えを得、生活の核を得た。そして私を通じて、二人と私の家族との新たな結びつきが形成され、リーザハとの関係もゆるぎない確固としたものとなった。(S. 731)
(斜字体は論者による)

リーザハと父をつなぎ、ナターリエとの結婚でマティルデともつながったハインリヒを中心に、「晩夏の[生]」のサークルは「核」のある、完全なものとなったのである。¹⁰⁾

IV. まとめ

リーザハと彼の息子になったハインリヒ。この二人の人生行路は全く対極的なものである。ハインリヒの、おめでたいまでの順風満帆の半生に対してリーザハの方は、人生の荒波にもまれるだけもまれる人生を送ってきた。この対比を象徴的に表しているのが、二人の最初の出会いである。雷雨になるかどうか、という点での意見の対立がこの二人の始まりであった。この対立を、最終的には親子関係にまで導き止揚してしまったのが、「対話」という行為である。これは、ハインリヒの父とリーザハの間でも言える事であろう。

ハインリヒはリーザハを通して自分の内にある才能を開花させ、また父親の「精神の本質」を知る。それに対してリーザハはハインリヒを通して何を見たのか。それは、自分の「晩夏の[生]」にいたるまでの経緯ではないだろうか。双方向的な「対話」の中でリーザハは、ハインリヒを教育する事により、自分の姿を改めて認識し続けていたと言えよう。つまりこのような事からも、彼等は二人で一つの「合わせ鏡」である、と言い得るのである。対立で始まった関係は、ハインリヒの結婚により一つの「合わせ鏡」と成る事で止揚されたのである。この止揚は、リーザハとマティルデの関係とドレーンドルフ家がそれぞれたどって来た両極的とも言える経過をも止揚する。そしてその止揚が完了する瞬間に、まるでその証しのように花を咲かせるのが、その入手にハインリヒも一役かったケレウス・ペルヴィアヌスである。この世にも珍しい花は、それぞれの「枯れ枝」が落ちる大地が見出され、確固としたものになった時、その大地から開花したのである。花が咲いた後に期待されるのは、ハインリヒとナターリエの人生の実りの季節、つまり「晩夏」であると言えよう。ハインリヒとナターリエは、その昔「二人の両親」がハインバッハで犯した過ち¹¹⁾を避け、リーザハの「御両親のようにおなりなさい(S. 715)」という言葉の通り、完璧な経過をたどり、

二人の「晩夏の[生]」を完成させる事だろう。それによって初めて、リーザハとマティルデの「晩夏の[生]」も真の意味での完成形態を成すのである。

(2000. 1. 8 受理)

使用テキスト

- Stifter, Adalbert: *Der Nachsommer*. München (Winkler) 1987.
ここからの引用については、本文中ではページ数のみを記した。

参考文献

- 谷口 泰『アーダルベルト・シュティフター研究。14の論考によるコンステラツィオン』水声社、1995年。
—『晩夏』論考。S. 241—284。
—『晩夏』。宝石(ペルソナ)の書。S. 285—300。
- Glaser, Horst Albert: *Die Restauration des Schönen. Stifters >>Nachsommer<<*. Stuttgart (J.B.Metzler) 1965.
- Selge, Martin: *Adalbert Stifter. Poesie aus dem Geist der Naturwissenschaft*. Stuttgart, Berlin, Köln und Mainz (Kohlhammer) 1976.
- Salm, Carola: *Reale und symbolische Ordnungen in Stifters "Nachsommer"*. Frankfurt a.M (Peter Lang) 1991.
- Begemann, Christian: *Die Welt der Zeichen. Stifter-Lektüren*. Stuttgart (J. B. Metzler) 1995.
- Blasberg, Cornelia: *Erschriebene Tradition. Adalbert Stifter oder das Erzählen im Zeichen verlorener Geschichten*. Freiburg (Rombach) 1998.
- ミハイル・バフチン(伊東一郎 訳)『小説の言葉』(平凡社ライブラリーは/7/1)。平凡社、1996年。
- 野家啓一『言語行為の現象学』。勤草書房、1993年。
- 立川健二・山田広昭『現代言語論。ソーシャル、プロイト、ウィトゲンシュタイン』。新曜社、1990年。
- 松岡幸司「閉鎖世界における至福のWaldgang。—シュティフターの『森ゆく人』の構造と解釈」(信州短期大学『研究紀要』第9巻第2号、1997年)

参考文献に関わる指示や引用は、著者と発表年、ページ数のみを記した。

注

- 1) 本論文は、「自然科学と芸術の間。シュティフターの『晩夏』論 —I—」(長野大学紀要第21巻3号。)

に続く研究の後半部にあたる。

- 2) Vgl. 1)、及び 谷口 S. 254f.
- 3) S. 729
- 4) この分析に関しては、松岡 (1997) を参照のこと。
- 5) Vgl. 松岡 (1997) S. 76.

生物学的な物質循環における「枯れ枝」は、親木を離れ地面に落ち、分解される事により、再び養分として親木に吸収され循環を継続する一地点を表すが、『森ゆく人』に現れるモチーフとしての「枯れ枝」は、人生の終末期に己れの「枯れ枝」を大地に落とす事で、己れの Heimat へ還ると同時に後に続く「若枝」を伸ばし、永遠の歴史の流れの中に、己れを参入させる、という事を象徴的に表している、と考えられる。

- 6) ハインリヒとナターリエの婚礼が終わった直後、それまでハインリヒを "Ihr" と呼んでいたリーザハは以下のように言い、ハインリヒを自分の息子と呼ぶようになる。

リーザハは私に言った。「我が息子よ。今から私は君を君 (*du*) と呼ぼう。君も私に、君の父親に対するように、そう呼んでもらいたい。(S. 715) (斜字体・下線は論者による)

- 7) Vgl. S. 700. ここでリーザハは、「功労という移ろいやすい行為のためにしばらく市民という身分から離れていたが、娘を得る事で、再び市民に戻る」と述べている。

- 8) マティルデがリーザハに、二人の婚約を報告した際、マティルデは「あなたはナターリエに対していつも父親のように (*wie ein Vater*) 振る舞った」と、「*wie*」を用いて明言しなかったのに対しリーザハは「私をナターリエの父 (*Vater Natalilens*) と呼ぶのだから…」と、自分がナターリエの父である事をはっきりと述べている。(S. 698f.) (斜字体・下線は論者による)

- 9) Vgl. S. 716.

ハインリヒの母は「ハインリヒは今のまま変わらない」と言ったナターリエに対して、「今の愛の大きさは本当ではなくなり、老人となった時には、誰も引き離さないように愛し合うようになる」と言っている。この内容には、ハインリヒの両親、それにリーザハとマティルデの姿と重なるものがある。

- 10) リーザハに婚約の報告が成された際、ハインリヒの父がリーザハに対して、自分の家族をリーザハの家族サークルへ入れて欲しい、という願いを申し出て、それが心から受け入れられた事も、象徴的である。
- 11) 若き日のマティルデは、彼女の両親の意向を尊重し彼女に別れを告げるリーザハに対して軽蔑の情を抱いたのに対して、ナターリエは初めから、ハインリヒとの愛の将来について、母やリーザハの意向を尊重したい、と言い、ハインリヒもそれに同意した。